



Title	日本語の対称表現の社会語用論的研究 [全文の要約]
Author(s)	都, 賢娥
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15213号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87166
Type	doctoral thesis
File Information	Hyunah_Toh_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 都 賢 娥

学位論文題名

日本語の対称表現の社会語用論的研究

本論文は、日本語の発話や会話の中の聞き手を指すために用いる指示的形式を「対称表現」と定義し、既知関係の相手（聞き手）に対する対称表現の選択動機と発話効果について社会語用論的研究を行ったものである。

以下に論文の構成と各章の内容について詳しく述べる。

本論文は序論と結論を除いて3部8章で構成されており、「序論」では本研究の目的と方法、論文の構成について述べている。第1部「予備的議論」では、本格的な考察に入る前に用語の定義や整理などを行っている（第1・2章）。本研究では既知関係の相手に対する対称表現の選択と発話効果を考察するため、普段の関係性や無標の呼び方が比較的容易に観察できる日本の映画やテレビドラマなどから用例を収集している。

第1章では、先行研究を参考して対称表現の定義を行い、その中で使用頻度が比較的高い固有名詞（個人の姓名）、普通名詞（職責など）、対称詞（「あなた」、「おまえ」などの語類）を中心に各表現の特徴を検討している。鈴木（1973）によると、日本語の「わたし・あなた・かのじょ」などは明治時代に西欧文法にならい一人称・二人称・三人称代名詞と名付けられたものである。しかし、西欧言語での人称は、佐久間（1951）でも指摘するように動詞との一致（agreement）を求める文法範疇としてのものであり、日本語には人称としての役割を担うことばがあるだけで、それらに文法的規則が適用されるわけではない。鈴木（1973）では、人称代名詞という用語の代わりに、人を表すことばとして自称詞（話し手が自分自身に言及することば）、対称詞（話し手が話の相手に言及することば）、他称詞（話し手が話に登場する第三者に言及することば）という三つの分類を設けている。本研究では鈴木（1973）に従い、聞き手のことを指す表現を「対称詞」として扱うが、鈴木（1973）では「そこのお兄さん」のような指示詞と対称詞の複合型や、「山田課長」や「山田さんあなた」などのような2種類以上の形式の複合型、さらに「山田さん」、「山田部長」、「お客さま」などの敬称との組み合わせなど、対称詞の中のバリエーションについては特に言及していない。そこで、本研究では日本語の聞き手を指す表現を幅広く網羅するため、聞き手を指す指示的形式を対称詞という用語の代わりに「対称表現」と呼ぶことを提案し、この対称表現が呼びかけとして機能する場合は便宜上「呼びかけ表現」と呼んでいる。また、日本語が文法範疇としての人称を持たない点から、本研究では「あなた・あんた・おまえ・きみ」などの語類を二人称代名詞という用語の代わりに本来の対称詞の意味を狭めて、これらの語類を指す場合を「対称詞」と呼んでいる。また、対称表現の主な種類として固有名詞、普通

名詞、対称詞の特徴を検討し、それに加えて指示詞や呼びかけ表現についても言及し、これらの出現位置や出現有無による機能の違いについても触れている。

第2章では、敬称や肩書（普通名詞）のように、従来の研究ではあまり注目されなかった対称表現と関わる付属的成分を取り上げ、各成分の特徴とその相違点について検討している。対称表現において、敬称は付属成分として聞き手への敬意を示す機能を持つ一方、「ちゃん・くん・さん・さま」のようなバリエーションが見られるため、形式の選択によって待遇度が調整できる。さらに、例えば「店員」という普通名詞を「店員さん」のように対称表現化できる点から、直示性（指示性）を付与する役割を担うと位置付けている。それに対して、肩書は固有名詞に付加された形でも単独でも使用できて、一般的な使用対象が目上の人物であるため、敬意を示す機能を持つと言える。さらに、本研究では目下への使用についても言及し、これらが下降的に使われると敬意を示す機能が薄くなり、敬称の場合は聞き手としての直示性（指示性）をより強化させて、普通名詞の場合は聞き手の職級という情報内容を示すため、聞き手において自分が指示対象であることを認識・自覚させる機能があることを論じた。一方、「きみたち」のような対称表現の複数形にも触れており、単数形に比べて聞き手の特定が難しくなるため、聞き手としての直示性（指示性）が弱化する、敬称の場合と相反する機能を持つことを指摘した。そして第1章との内容を踏まえ、本研究における対称表現の分類（固有名詞、普通名詞、対称詞、指示詞、呼びかけ表現、付属的成分：敬称、肩書、複数形）を行っている。その中の主な種類である固有名詞、普通名詞、対称詞の特徴について、固有名詞は個体としての聞き手の「情報内容」を表す、普通名詞は聞き手の「社会的役割性」を間接的に表す、対称詞は会話参加者としての「聞き手性」を表すと簡単にまとめることができる。

第2部「日本語の対称詞の選択動機に関する考察」では、主に「あなた・あんた・きみ・おまえ」などの対称詞に焦点を当てて、その選択動機を考察している（第3・4・5章）。

第3章では、対称詞の選択に関わる要素を話し手のコントロールの可能有無・容易さによって外的要因（規範としての要素：物理的性別、年齢、社会的上下関係など）と内的要因（話し手の表現意図と関わる要素：ジェンダー、品位、親疎関係など）に分け、各要素が対称詞の選択にどのように影響するのかを整理している。対称詞の一般的な選択に関わるものは外的要因であるが、女性による「おまえ」の使用のように、日本語におけるステレオタイプから外れた選択が見られる場合、話し手の表現意図と関わる内的要因が言葉遣いにおけるステレオタイプや規範よりも優先されることを指摘している。

第4章では、対称詞を中心に固有名詞と普通名詞が対称表現として解釈されるまでのプロセスについて、文脈という観点から比較考察している。対称表現の中には、固有名詞や普通名詞のように形式から個人に関する情報がある程度読み取れるものもあれば、対称詞のように形式だけでは個体としての聞き手が把握できないものもある。対称詞が聞き手を指していると把握（解釈）するためには、我々は会話参加者や発話場面などといった「文脈」を常に参照することになる。そこで、発話解釈に関わる文脈として、加藤（2017）での形式文脈・状況文脈・知識文脈の違いを検討し、それぞれの対称表現が持つ特徴の違いによって、各表現が聞き手を指すと解釈されるまで必要な文脈の種類と活性化の段階に見られる相違点について論じた。対称詞は、形式（形式文脈）だけでは個体の特定が不十分であり、その形式が

指しているのは他の者ではなく「話し手が指す聞き手」であることを話し手と聞き手が発話状況（状況文脈）の中で共有しなければならないため、形式・状況文脈を参照することになる。固有名詞は、形式自体が定性を帯びて個体としての情報内容を含んでいるため（形式文脈）、話し手が聞き手に関する情報（知識文脈）を知識として有すれば良い。普通名詞の場合、代表例と言える親族名詞や役職名詞の場合、その形式（形式文脈）が含む聞き手に関する社会的属性を話し手が知る必要があり（知識文脈）、個体としての情報内容は含んでいないため、対称詞のように発話状況（状況文脈）も参照する必要がある。つまり、固有名詞と普通名詞に比べて、対称詞は聞き手に関する情報（知識文脈）を持たなくても発話状況（状況文脈）を参照することによって聞き手が特定できるという相違点が見られた。

第5章では、対称詞「あなた・あんた・おまえ・きみ」を中心に、これらの意味的変遷と現代での使用実態を検討し、対称詞の選択動機としてスタンス（stance）の観点から考察を行っている。対称詞の特徴として共通的に見られる点は、同等または目下の人物への使用が一般的であると言えて、各表現の違いとして、1)「あなた」は敬体・常体の両方と共起し、性別に関わらず使用できる、目下に対する改まった指示・忠告などでの使用が多く見られる、聞き手に対する話し手の距離感が読み取れる点が挙げられる。2)「あんた」は「あなた」の異形であり、対称詞の中でも地域差が著しく見られる表現であった。常体のみと共起し、女性による使用が多く、聞き手に対する話し手の感情の表出が見られ、そこから聞き手への遠慮や距離感は感じられない。3)「おまえ」の場合も常体のみと共起し、男性による使用が多く、「あんた」と同じく聞き手に対する話し手の感情の表出が見られ、そこから聞き手への遠慮や距離感は感じられない。4)「きみ」は敬体・常体の両方と共起し、男性による使用が多い方であるが、男性同士における「おまえ」に比べると親しみはそれほど感じられないという特徴が確認できた。一方、既知関係の相手に対する対称詞の使用は、固有名詞と普通名詞の場合に比べると有標の呼び方であるため、対称詞の選択の際に話し手が聞き手をどのように捉えているのか、つまりどのようなスタンスを表示するのかが強い動機として働くことを主張した。そこで、Du Bois (2007) によるスタンスの概念を参考して、本研究ではスタンスを聞き手に対する話し手の「捉え方」と定義し、大きく認識レベル（聞き手の意見や価値観などに対する話し手の捉え方）と情緒レベル（聞き手の人間性や言動に対する話し手の感情的捉え方）のスタンスがあり、それぞれの対立有無によって認識の対立・非対立のスタンスと情緒の対立・非対立のスタンスといった4種類の単一型スタンスに分類した。さらに、認識と情緒のスタンスが同時に見られたり両者の対立有無がずれていたりする可能性も考慮して、対立のずれの有無によって①認識的・情緒的な対立のスタンス、②認識的な対立・情緒的な非対立のスタンス、③認識的な非対立・情緒的な対立のスタンス、④認識的・情緒的な非対立のスタンスの、4種類の複合型を設けた。また、対立・非対立のスタンスの表示は、話し手の聞き手への心理的距離の表示と調整にもつながることを指摘し、Brown&Levinson (1987) によるポライトネス（politeness）理論と滝浦 (2008・2020) の距離の理論の観点から主にポライトネスの文脈における対称詞の選択動機と発話効果を考察した。聞き手に対する話し手のスタンスが対立している場合には、相手に距離を置く遠隔化が見られる可能性が高かったが、非対立の場合には相手との距離を縮める近接化が見られる可能性が高く、前者の場合には「あなた・（きみ）」が、後者の場合には「きみ・あんた・

おまえ」がその発話効果を確定させる言語的手段として選択されることが確認できた。

第3部「日本語の対称表現における発話効果の比較考察」では、聞き手に対して2種類以上の形式を用いる場合に着目し、その選択動機と発話効果について比較考察を行っている（第6・7・8章）。

第6章では、対称詞における「あなた」の特殊性について検討し、対称詞間における転換とその発話効果を考察している。「あなた」は他の対称詞に比べて話し手の性別（またはジェンダー）はあまり影響しないが、話し手の年齢による制約が大きい点を指摘した。また、異形である「あんた」と発話効果を比較考察することによって、「あなた」は聞き手に対して距離を示すという機能に加えて、話し手の品位を表示・保持する機能を持つことが用例の分析によって明らかになった。「あなた」の使用の中には、特に距離を置いたり対立のスタンスを示さない場面での選択も見られたが、それは聞き手との距離の調整より話し手自身の品位を示すという動機が強く反映されていることを主張した。一方、相手に距離を置いて冷たい感じを与えたり、自分の品位を表示することは、話し手のキャラクターの形成に影響することを指摘し、日本のテレビドラマや映画の用例から作中の落ち着いて冷静な性格の人物を描くときには「あなた」と敬体を使うことによってそのキャラクター性をより強化できる点を確認した。実際の使用に関しては、10代が親しい友人同士で「大人」というキャラを真似して（一時的に演じて）使う「あなた」とも関連があることが例として見られた。そして、同じ聞き手に対する発話の中で「あなた」は「あんた」と「きみ」との間では対称詞間の転換が見られたが、待遇度という尺度の中で比較的低い位置を占める「おまえ」の場合、「あなた」との転換が一般的ではないことが見られた。そこから、同じ対称詞間における転換だとしても、同じ尺度を共有していればその転換可能性が高くなることが明らかになった。

第7章では、第5章でのポライトネス理論と関連するインポライトネス (impoliteness) の観点から、本研究でのインポライトネスを論じた上でその文脈における対称詞の使用と発話効果を考察している。インポライトネスは、相手を意図的に貶めたり侮辱したりするための言語行為的ストラテジーであり、本研究では主にCulpeper (2011) とCulpeper and Haugh (2014, 椎名・加藤・滝浦・東泉訳 (2020)) の先行研究を参考している。ポライトネスの場合と同じく、インポライトネスは文脈依存的な性質が強いため、日本語の対称詞自体がインポライトネスの形式（語彙的項目）になるとは言いにくいだが、そのような文脈での使用を考察した結果、インポライトネスとしての解釈をより確定させる言語的手段として位置づけることができた。一方、インポライトネスの中には解釈によってその扱いが微妙なものもあり、からかい (banter) や冗談 (joking) などがその代表的な例として挙げられる。Culpeper and Haugh (2014) では、これを「擬似インポライトネス (mock impoliteness)」と呼んでおり、インポライトな形式を使うが、その効果が文脈によって打ち消されているものであると説明する。また、擬似インポライトネスよりもさらに暗示的にインポライトネスを示唆する文脈もあって、Culpeperたちは当てこすり (sarcasm) や皮肉 (irony) を挙げている。本研究では、擬似インポライトネスや暗示的なインポライトネスをインポライトネスにおける「逸脱的」なものとして位置づけて、そのような文脈における対称詞の使用についても考察を行っている。逸脱的インポライトネスについて、インポライトネスの解釈において形式と発話効果がずれている場合であると定義し、そのずれの種類によって、形式上はポ

ライトネスだが発話効果がインポライトネスであるもの（皮肉・マウントなど）と、形式上はインポライトネスだが発話効果がポライトネスであるもの（からかい・冗談・つつこみなど）の2種類に分類した。さらに、第5章でのスタンスの分類の中には、認識と情緒レベルのものが混在・ずれている複合型（①～④）があったが、認識と情緒が混在する場合には、ある言語行動を行った場合、その発話効果（解釈）がポライトネスとインポライトネスの境界上に置かれる可能性が高く、認識と情緒における対立・非対立の方向性がずれている場合、感情レベルである情緒的スタンスが強く機能する可能性が高いことを指摘した。逸脱的インポライトネスをスタンスの観点から見ると、からかいや冗談は複合型②：認識的な対立・情緒的な非対立のスタンスのように、感情的には非対立のスタンスを持っているため、インポライトネスとポライトネスの近接化の発話効果が同時に見られたり、全体的な解釈はポライトネスの方に向かう可能性が高いと言える。それに対して、皮肉やマウントは認識と情緒のスタンスがすべて対立している可能性が高いため、ポライトネスとしての形式を使っているものの、全体的な発話効果としては相手を下げるというインポライトネスの方に向かう可能性が高いことを主張し、各文脈での対称詞の使用と発話効果を考察した。

第8章では、一つの文脈の中で同じ人物を指す場合での、対称表現の中の異なるカテゴリーの表現における転換を考察し、その発話効果と転換の動機について「対人距離の動的調整」という観点から論じている。まず、既知関係の聞き手に対する対称表現の選択に見られるカテゴリー転換として、固有名詞と対称詞における転換を中心に、その選択動機と発話効果を考察した。固有名詞は敬称と共起できて、敬称の中から待遇度の違いが見られることによって、固有名詞という一つのカテゴリーの中でも形式の転換が見られ、そこから話し手と聞き手における「縦」の調整が可能であり、縦の調整に伴って相手に敬語を使うことによって心理的距離を遠ざけるなどの「横」の調整が可能であることが確認できた。それに対して、対称詞は敬称との共起が頻繁に見られるわけではないが、対称詞の種類によるスタンスの表示や対人距離といった「横」の調整が可能であることが見られた。さらに、固有名詞と対称詞間のカテゴリー転換とその動機の考察に加え、各カテゴリーの内部における転換とその動機に関しても考察の余地を広げた。従来の研究では、話し手と聞き手における対人距離を説明する際、この縦と横の関係を特に考慮せず、片方だけの関係を中心に考察を行うことが多かったが、対称表現の選択に見られる距離の調整は、対称詞の選択によって聞き手に対する話し手の「横」の関係から見た心理的距離の微妙な調整もできて、固有名詞に敬称のような形式の付加による「縦」の関係を大きく調整することも可能であると言える。そして同じカテゴリーにおける転換だけではなく、固有名詞から対称詞へといったカテゴリー転換が見られるのは、話し手と聞き手における無標の呼び方、つまりゼロの初期値から「縦と横」の次元の関係を調整する「動的調整」がその動機として作用されることを主張した。このような対人距離の動的調整は、（イン）ポライトネスの判断にも貢献できると考えている。（イン）ポライトネスは言語形式だけでは判断が困難である場合が多く、文脈依存的だという特徴があるため、その判断のためには話し手と聞き手におけるデフォルトの関係やスタンスを基準として、そこからプラス待遇なのかマイナス待遇なのかを判断する必要がある。本研究での対人距離の動的調整という観点が（イン）ポライトネスの研究や距離の理論の発展に貢献できるよう、今後更なる検証を行っていきたいと思う。

最後の「結論と今後の課題」では、本研究での主な研究成果と残された課題についてまとめている。ここでは今後の課題について2点を挙げる。第一に、本研究では対称表現、スタンス、逸脱的なインポライトネスなどに関して、先行研究を参考し新しい定義や分類を提案している。これらと関連する諸要素を網羅できるように、今後より精密かつ論理的に分類を加えていく必要がある。また、対称表現の選択による動的距離の調整という観点を他の待遇表現に発展させ、日本語における（イン）ポライトネスの研究に更なる発展を資することが期待できる。第二に、より多様な場面での対称表現の選択が見られる用例を収集し、その選択動機と対人距離の調整を明らかにする必要がある。また、近年は海外のドラマや映画がローカル化される場合も多いため、同じ場面での対称表現の選択や使用に関する対照言語学的研究への発展も期待できる。